発行日:令和5年6月15日　　電話:0120-087-052

第七十六号

会報

浄土真宗

太陽の会

太陽の塔桜ケ丘【感謝祭】開催報告

ご参集いただきました約１５０名の会員の皆さまと共に春彼岸で手を合わせました

令和5年3月21日（火）太陽の塔桜ケ丘において、春の彼岸法要を兼ねた【感謝祭】を開催しました。

従来、本堂に溢れるほどの皆様に集まって行っていた彼岸法要、年末には感謝を込めて餅つき大会を行っていましたが、新型コロナウイルス感染の拡大している状況を鑑み開催を中止しておりました。

今回、新型コロナウイルス感染予防対策が緩和されことにより、合同での【感謝祭】を執り行いました。

当日は、少し肌寒い中ではありましたが、屋外にテントを張って行いました。11時からは、餅つき大会で恒例となった抽選会と、子供たちのためのお菓子の詰め放題コーナーを設け、楽しんでいただきました。

又、ご参加いただいた方全員に記念品も用意させていただきました。

今後とも、多くの方に参加していただける法要が行えますことを祈念しています。

「令和五年　行事予定」

○盂蘭盆会
8月9日(水)
午前の部　受付　十時～
開式　十時半～
午後の部　受付　一時半～
開式　二時～

○秋季彼岸会　合同追悼法要
日時未定
改めてご案内します

法要再開の見通しが立ちましたのでご案内致します。右記の通り開催を予定していますので、ぜひご参加下さい。

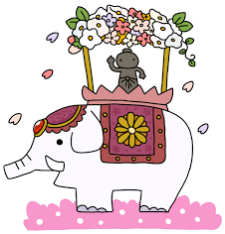
ご法事の会場貸の予約を承っております。なお法要室は宗旨・宗派を問わずご利用いただけます。ご不明な点がありましたら、お気軽にお問い合わせください。

（法務担当者）

非売品　（宗）太陽の会　〒721-0945　福山市引野町南一丁目17番地32号

「四月八日は花まつり」

四月八日はお釈迦さまが誕生された日として毎年お祝いをします。それを「花まつり」「降誕会」(浄土真宗)「灌仏会」「仏生会」など、様々な名称があります。お釈迦さまがお生まれになった時、その場ですぐに立ち上がり、七歩、歩まれて、右手で天を指し、「天上天下唯我独尊」(全ての人は平等で尊く、この世に使命を持って生まれる)と仰られました。その為、お釈迦さまの立像は右手で天を指し示めされています。



太陽の会でも四月八日から一週間を「花まつり週間」として受付ホール内に供花と共にお釈迦さまを安置させていただきました。例年通りであれば、甘茶接待もしておりましたが、この度は尊前での合掌のみとさせて頂きました。

教えて仏事の事①

「法事って何のため?」

法事をなぜやるのかといえば、それは【御恩報謝】です。一言で済むのですが、もう少し丁寧に言えば、三回忌までの法事は、遺族の悲しみを乗り越える為のものであり、七回忌からの法事は、亡くなった大切な人を思い出す為の法事だといえましょう。

数えてみれば、お葬式が終わって最初の法要が、初七日。それから四十九日の満中陰までで、七回の法要があります。次に百カ日、そして丸一年経って一周忌があり、さらに翌年には三回忌があります。これで初七日から数えて計十回となります。この十回は、愛別離苦の苦しみや喪失感を癒していく為の行事です。最初は一週間ごと、少し間をおいて三カ月を過ぎたころと、亡き人を思い、間違いなく救ってくださる阿弥陀さまの恩徳を讃える法要を勤める事で、愛する人を亡くし、心にポッカリと開いた穴が、次第に埋められていくのです。それが悲しみを忘れる為の法事という意味です。愛別離苦は、人間である限り、逃れる事のできない悲しみであり、苦しみなのですが、その苦悩こそ、私自身が仏さまの教えに触れていくきっかけになります。

ところが、人間とは勝手なもので、時間の経過とともに、大切な事も忘れていくものです。悲しみが癒されたのは良い事ですが、今度は日常生活を繰り返していくうちに、仏さまのご恩も忘れ、亡き人の思い出も徐々に風化していきます。

少し立ち止まって、亡き人を思い出し、いつでもどこでも、この私を照らし続けてくださっている仏さま、そのご恩を想うという意味で行う最初の法事、それが七回忌からです。

七回忌は、亡くなってから丸六年目。十二支でいえば、ちょうど半分が周ったところになります。七回忌が済むと、次は十二支が一周する十三回忌となります。それから十七回忌、次に二十三回忌、二十七回忌、三十三回忌、そして五十回忌と、次第に間隔を広げながら勤めていく事になります。「いつまで法事を勤めるの?」と聞かれますが、法事にいつまでという期限や概念はありません。どうぞ、いつまでもお念仏と共に次の世代へと引き渡していって下さい。

「クイズ浄土真宗」

Q、阿弥陀さまはいつ救いに来られる？

❶ 念仏を称える度に

❷ 臨終の時に

❸ 今、来られている

阿弥陀さまは「死ぬ時に救いに来られる」と思っておられる方が多いのではないでしょうか？

昔はお年寄りがよく「まだ、お迎えに来られませんので…」と自分が元気でいる事を、遠慮がちに語られたものでした。

親鸞聖人が出られる前は、全てそのように解釈されていました。つまり「阿弥陀さまは、人々が命終わる時に迎えに来られて、浄土へ連れて帰ってくださる」と信じられていて、そのお迎えの姿を心乱さずに、しっかりと感じる事が重要でした。実際に迎えに来られるかどうかは、臨終の時に決まるとされていたのです。ということは、いま生きている人生は、死ぬ時に阿弥陀さまに迎えに来てもらう為の準備期間でしかないという事になってしまいます。

しかし、親鸞聖人は、阿弥陀さまの本意は、死ぬ時だけを問題にされたのではなくて、まさに今生きている時の苦悩を救う事にあると受け取られたのです。それは、私が阿弥陀さまのお名前（名号）を呼んで初めて迎えに来られるのではなくて、こちらが呼ぼうが呼ぶまいが、いつでもどこでも時間を隔てる事なく、常に救いのはたらきを続けておられると味わわれたのです。ただ、それを受け取るのは自分自身なのです。

クイズの答え・③

Q、阿弥陀さまはいつ救いに来られる？

「歎異抄（たんにしょう）を読む」

『歎異抄』は、親鸞聖人が亡くなった後、門弟の間に真実の信心に背く異議が生じたことから、聖人から口伝を受けた著者が、同心の行者の不審を除く為に著した親鸞聖人の言語録です。

念仏は、まことに浄土に生まるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもって存知せざるなり。

釋蓮如（『歎異抄』第二条）

「人間の言葉は当てにならない

そんなものに惑わされるな」

親鸞聖人は、「念仏が浄土に生まる因か、地獄に堕ちる行いなのか、全く知らない」と言われている。この知らないという言葉は、私が判断するのではないという事を知らせるとともに、人間の言葉によって認証を得ようとする事の危険性を教えてくれる。

「四月～六月のことば」

太陽の会では、館内入口・本堂入口に「月のことば」を掲載させて頂いております。お経は難しいと思われる方もいらっしゃるとは思いますが、身近なやさしいお言葉として皆様のお心で味わって頂けたら幸いです。

【四月のことば】

仏法の鏡の前に　立たないと
自分が自分になれない

「二階堂行邦」

仏は人を鏡として仏となる。人は仏を鏡として人となる。という曽我量深師の言葉をもとにされています。「仏は人を鏡として仏となる」とは、修業時代の阿弥陀如来が人間を見抜き、その人間を救う為に必要なものを完璧に準備して阿弥陀如来という仏に成られたという意味です。阿弥陀如来が見抜かれた私たち自身のすがたを聞く、つまり仏法の鏡の前に立てば、私たちは私たちの姿を忠実に知ることが出来るのです。

自分自身の心に振り回されて「足りない、足りない」と思い続けるよりほかない私たちも、阿弥陀如来との出会いによって、足りないと思う自分のありのままを知らされ、悩みを抱えたままに阿弥陀如来に抱きとめられている自分を、素直に認めていくことができるようになります。

【五月のことば】

南無阿弥陀仏とは
言葉となった仏なのです

「真宗僧伽論」

阿弥陀如来とは、南無阿弥陀仏という言葉になって私たちに至り届く仏さまです。阿弥陀如来が言葉となって私たちに至るすがたである南無阿弥陀仏を、お名号と呼んでいます。水と氷とが、すがたの違いであって同じものであるのと同様に、阿弥陀如来とお名号・南無阿弥陀仏もまた、二つに分けることができないものであります。

南無阿弥陀仏は、私たちの心に届いて信心となり、念仏となって口に現れてくださいます。それは、私たちの立場に立っていえば、阿弥陀如来によって明らかにされた私たちの「煩悩病」という自分自身の心に振り回されるすがたをありのままに知らされることであり、阿弥陀如来のたしかな導きのなかで、お念仏申す生活が続いていくのです。

【六月のことば】

信は
如来の生命なり

「小山法城」

宗教で示される「信」は、一般的に私たちの持つ信仰心と考えることができます。しかし、ここではその「信」が「阿弥陀如来の生命」であるということは、どういうことでしょうか。

親鸞聖人がおっしゃる浄土真宗の信心とは、私が信じずにはいられないようになった心です。つまり信心とは、阿弥陀如来のはたらきが、そのまま私たちの心に届いたすがたであり、阿弥陀如来が私たちの心を場として躍動しているすがたを「信は如来の生命なり」と表現されているのです。